

---

# 死神と私

冬華白輝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死神と私

### 【Nコード】

N3683Z

### 【作者名】

冬華白輝

### 【あらすじ】

突然死んでしまい死神に追いかける羽目になってしまった主人公。

死神に説得されて向かった先は死因を調査するための施設。そこで自分の死因を知った主人公は、閻魔をめぐる事件に巻き込まれて調査することに・・・。

## 死神と出会う（前書き）

ミステリーというにはおこがましく、ファンタジーというほど剣と魔法が出るわけでもなく・・・ですが、楽しんで読んで頂ければ嬉しいです

## 死神と出会う

目の前に突如現れた黒い影。

実家の職業柄か、それがいったい何なのかわかってしまった私は、目を合わせる寸前に身を翻し、その影から逃げた。

それは、死神と呼ばれるものだった。死神が迎えに来たということとは、今の今まで病氣らしい病氣もせず、元気だけが取り得の私に寿命がきてしまったというのか。

たった16年しか生きていないのに……。 “まだ、死にたくない！” そう思っ、裸足のまま私は逃げた。

『里乃……里乃……』

逃げても逃げても、死神の声は追ってくる。

「……チツ……里乃、逃げんな、てめえ！」

いきなり口調が、がらりと変わった。私は思わず振り向いてしまい、死神と目を合わせてしまった。

ぜえぜえといいながら、その死神は私の肩を掴んだ。

「捕まえたぞ、死神と目を合わせたらそれでお終いってのは知ってんだろ?・・・よし、じゃ、行くぞ」

「・・・あの世に?」

私は聞かなくても解ることを聞いた。死神は、いやな顔もせず、律義に答えてくれる。

「ああ、あの世、天界、天国、霊界、いろいろ言い方はあるが、そこだ。・・・でも、フツー直行するんだが、おまえ達みたいな若い連中は特別、そこに行く前に調査される」

「え、どうして?」

私は思わず聞き返していた。

「・・・何で鬼籍に載っちまったのか、調べんだよ」

死神は天を仰ぎながら、ぽりぽりと鼻の頭を搔く。あまりにも人間らしい仕草に、私は妙にこの死神に親近感を覚えた。

「・・・でも、結局はあの世行きでしょ?」

「いや、場合によっては、死神になったり、調査チームに配属させられたりすることもある」

さらりと答えた死神に私は驚いた。

「じゃあ、死神、あなたも？」

死神は眉をひそめて不快感に私を見る。

「死神って呼ぶな。オレにだって名前くらいある。和幸<sup>かずゆき</sup>って呼べ。  
・まあ、答えはYesだ。オレも18で死んで調査の結果によつて死神になった」

「調査の結果って？どんな結果がでるとそうなるの？」

「・・・呪殺だと死神、生け贄および身代わりだと調査チームだな」

「それって、本来死ぬはずではない人じゃない」

「ああ、そうさ。だから、こうして半死半生みたいな生活してんのさ。生き返れるわけじゃねえからな。死神の仕事はメインはこういう鬼籍に載ったやつを迎えだが、許可が下りれば自分の復讐も可能だ。自分を殺したやつを殺す。調査チームの場合は、生け贄にした人物、もしくは自分が身代わりになった相手を鬼籍に載せることができる」

死神、和幸はそう言って、にやりと笑う。まるで、それが目的で死神になった、とでも言うように。

「そ、そうなの。・・・私は、どうなるのかな？」

「フツーに理由があつての死亡ならソッコーあの世行き。でも、オレには、どーもおまえがフツーに死んだとは思えねえ。多分、死神か、調査チーム入りは間違いねえな」

和幸はそう言つと、私の頭を軽くこづく。

「さ、無駄話はここまでだ。・・・行くぞ」

「う、うん」

私はあの世に連れて行かれることは変わらないというのに、さっきまでの恐怖が嘘のようになくなっていくのに気がついた。

和幸のおかげかもしれない。

## サーチオーロラ

私達は調査するための施設“しやうさしつ照査室”というところに来ていた。和幸が腕のエンブレムを見せると扉が開く。

バリアーのような光の幕をくぐると次の瞬間には、まるで病室のような白を基調とした広い部屋の真ん中に私達は立っていた。

「秋波里乃さん、前に進んでください」

「あ、はい」

目の前にある大きな机に座っている、女の人に手招かれる。

「里乃さん、あなたの健康状況は非常に良好でした。まず間違いないく、鬼籍に載るのはもっと先だったはずです」

「え、あ、そうなんですか・・・」

間拔けな答えを返してから、私は和幸に視線を向ける。

「調査するんじゃないかったの？」

「さっき、光の幕をくぐったろ？あれで全部調査できるんだ。え、と、なんつったっけか？」

「サーチオーロラです」



和幸が聞くともう何回も聞かれているようで、ウンザリといったように女の人は溜め息混じりに答える。

和幸はそう、それぞれ。と言いながら私の方に向き直る。

「そのサーキンなんかつてのが、ゼーんぶ調べてくれるわけさ」

「サーチオーロラ！」

ガタン、と立ち上がった女の人は堪忍袋の緒が切れたという顔をしながら叫んだ。

「解ってるって、サーモンチキンだろ？」

「・・・かあゝずうゝゆうゝきいいい・・・」

「そんなに怒んなよ、沙希<sup>さき</sup>。サーチオーロラだろ？冗談も通じねえヤツは嫌われッぞ」

和幸はけろりとした顔で言うと、沙希さんの方に私を押しやる。

「で、こいつはどっちよ？」

「決定権は上官の志貴様<sup>しき</sup>にあるわ」

「でも、大体の所は解るんだろ？」

ずいっと和幸が身を寄せると、沙希さんはたじろぐ。

「・・・規律違反だよ、和幸。調査チームから死神が情報を聞き出

してはいけない」

「志貴！」

なおも和幸が沙希さんに聞き出そうとしたとき、私の後ろから声がかかる。ビックリしたのは私だけではないようで、和幸も沙希さんも驚いた様子でこちらを見ている。

私の真横に來ると、志貴と呼ばれた男の人は私に笑いかけた。

「里乃さんには後ほど個別にお知らせします。まずはこれから使う部屋の方に案内させましょう」

「あ、はい、ありがとうございます」

「志貴！なんで、おまえが最前線の照査室までくんだよ？」

和幸は掴みかかりそうな勢いで志貴さんにくっつかかる。

「・・・里乃さん、和幸は何か失礼なことをしませんでしたか？」

「おい！志貴！無視すんな！」

「いえ、別に・・・あの・・・？」

かみつく勢いで真横で叫ぶ和幸と、それを平気な顔で無視している志貴さんに目をやる。志貴さんは戸惑う私を見てクスリと笑う。

「ああ、僕と和幸は上官と部下という関係以前に兄弟なんですよ。ちなみに僕が兄で和幸が弟です。詳しい話はあとで和幸に聞くといい

いですよ。しばらくは和幸があなたのサポートにつきますから」

「あ、はい」

私は和幸を見る。和幸はじつと志貴さんを睨むように見つめている。

「そうそう、僕がどうして本来いるべきはずの閻魔様の元を離れてここに来たかっていうとね、しばらくの間、照査室を閉じることになったからだよ」

笑顔のまま、志貴さんは先ほどの和幸の質問に、やっと答えを返す。

「照査室を閉じる！？どういうことです？志貴様」

沙希さんが驚きの声をあげると、志貴さんは表情を曇らせる。

「うん、閻魔様がおっしゃるには、ちょっと問題が起こったみたいだね。今日は里乃さんが最後だったようだからここを一番最後に閉じることにしたんだよ。他の所はもうみんな閉じてある。・・・それで、君達を信頼して、頼むんだけど・・・」

「内部調査か？」

志貴さんの科白を和幸が引き継ぐ。志貴さんはじつと和幸を見つめ、頷く。

「頼めるかい？和幸」

「これやったら・・・」

「・・・許可が下りる可能性は高くなるね」

「じゃ、やる。沙希も里乃も勘定に入ってるのか？」

「・・・沙希だけ。里乃さんには他の仕事を頼むことになりそうなんだ。それも後で里乃さんに直接お知らせしますから。・・・取り敢えずここは閉じる。沙希は本部に戻ってくれ。和幸は里乃さんを部屋に案内して」

志貴さんの指示に二人は大人しく従い、私は和幸に連れられ照査室から宿舎に移動することになった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3683z/>

---

死神と私

2011年12月20日15時48分発行